

研究テーマ

規範意識の芽生えを培う援助の工夫

～劇づくりにおいて協同する経験の充実を通して～

沖縄市立室川幼稚園

教諭 大城 久枝

I 研究テーマ設定理由

近年、基本的生活習慣の欠如、自制心や規範意識の希薄化、コミュニケーション能力の不足、小学校生活にうまく適応できないなど子どもの育ちにおいての課題が指摘されている。このことは、少子化や核家族化、情報化など社会の変化が背景にあると考えられる。このような環境の変化の中で、人と人とが尊重し合い、協調して社会生活を営んでいくためには、守らなくてはならない社会のきまりがある。そのため幼児期では、教師や友達との集団の生活を通して、気付いたり感じたりする体験を重ねながら規範意識の芽生えを培うことが大切であるとする。

幼稚園教育要領の領域「人間関係」の内容の取り扱い(5)では、「集団の生活を通して、幼児が人とのかかわりを深め、規範意識の芽生えが培われることを考慮し、幼児が教師との信頼関係に支えられて自己を発揮する中で、互いに思いを主張し、折り合いを付ける体験をし、きまりの必要性などに気づき、自分の気持ちを調整する力が育つようにすること」と規範意識の形成の流れで示されている。

本園の幼児は、好奇心旺盛で活発な子が多い。しかし、話を最後まで聞けず自分の思いばかり主張して相手の気持ちに気付けない子、反対に自分の思いを伝えられずにいる子などがある。また、集団生活のきまりは知っているが、学級活動で思いのままに行動してみんなの輪から抜けてしまう子の姿も見られる。学級の一員としての意識や自分の気持ちを調整する力を育むことが課題だと感じる。

これまでの保育では、幼児が安心して自己を発揮できるような場の設定や雰囲気作りを心がけてきた。しかし、問題解決を急ぐ余り、幼児

が納得いく話し合いができず、相手の思いに気付くきっかけを妨げていたこと。必要な行動やきまりに幼児自身が気づき、理解できるような援助に欠けていたことなど反省点があげられる。

これらの解決には、「幼児が集団の中で安心して自己を発揮し自信をもって行動できるようにすること」、「協同する経験を通して、自他の気持ちの違いを感じる体験や葛藤、思い通りにならない体験、折り合いをつける体験などを重ねること」、「そうした過程の中で友達とのかかわりを深め、規範意識の芽生えを培うこと」が重要だと考える。

そこで、様々な感情体験が経験できるような劇づくりを計画的に取り入れ、学級で目的を共有し協同する経験を重ねられるようにしていきたい。その中で、葛藤体験や折り合いをつける場面を捉え、個々に応じた援助をし、一人一人の思いや活動をつなげたい。また、思いを主張し合い、自分とは違う考えに気づき、互いに認め合えるような伝え合う場を工夫し、学級の一員として仲間意識を高めたい。そうすることで、友達とのかかわりが深まり、協力して生活していく楽しさを味わうであろう。さらに、友達と楽しく過ごすためには、きまりが必要であることに気づき、気持ちを調整しながら行動していくものとする。

本研究では、教師が一方的にきまりや約束を教え込むのではなく、友達と一緒に楽しく遊ぶ中で、友達と協力することやきまりの必要性に気付けるような協同する経験を充実させたい。劇づくりを通して学級で協同する楽しさを味わうことで、規範意識が芽生えるであろうと考え、本テーマを設定した。

II 目指す幼児像

- 友達と協力して遊びや生活を楽しむ子
- きまりや約束の必要性に気付き、自分の気持ちを調整しながら行動する子

III 研究目標

規範意識を培うために、協同する経験を充実させることが重要であることを、劇づくりを通して実践的に検証する。

IV 研究仮説

劇づくりにおいて、友達と協力することやきまりの必要性に気付くような協同する経験の充実を図ることで、規範意識の芽生えを培うことができるだろう。

V 研究構想図

下記に表す。



VI 研究内容

1 理論研究

(1) 規範意識の芽生えについて

学校教育法における幼稚園教育の目標の一つに、「集団生活を通じて、喜んでこれに参加するという態度を養うとともに家族や人への信頼感を深め、自主、自立及び協同の精神並びに規範意識の芽生えを養うこと」(第23条第2号)が示されている。この目標の実現のために、幼稚園教育要領の中でも、平成20年の改訂で、領域「人間関係」の内容の取扱い(5)に「規範意識の芽生え」を視点とした内容が取り上げられた。

幼稚園教育要領の「人間関係」から「規範意識の芽生え」と共に「道徳性の芽生え」の育ちを無藤隆著「保育の学校」(2011)を参考に下記にまとめる。この2つは重なり合う部分があるため、両面を理解したうえで「規範意識の芽生え」を培うことを目指したい(表1)。

表1 規範意識の芽生えと道徳性の芽生え

○規範意識の芽生え

きまりの必要性などに気付く⇒自分の気持ちを調整すること。「気付き」(認知的)中心

○道徳性の芽生え

他の人の存在に気付く⇒相手を尊重し行動する⇒豊かな心情が育つようにする⇒人に対する信頼や思いやりの気持ちが芽生えてくるようにすること。「思いやり」(心情的、感情的)中心

幼児期に必要な「規範意識の芽生え」とは、単に与えられたきまりを守ることができるようになるということではない。幼児自身が友達とのかかわりを深めながら、互いに思いを主張し合うことで、相手の思いに気付き、折り合いをつける。楽しく遊ぶために必要なきまりや約束に気付く。さらに、新たなきまりが必要になったときは、自分たちなりに考え生み出していく。そこでは、自分の主張ばかりするのではなく、「自分の気持ちを調整する力」が必要である。それらの過程を経ながら、「規範意識の芽生え」は形成されると考えられている。

規範意識の形成の過程で、幼児は教師との信頼関係を基盤に自己を発揮していくため、幼児とのかかわりや援助が大切であると考える。

幼稚園教育要領の「人間関係」内容の取扱い(5)から幼児期の「規範意識の芽生え」が培われる過程をまとめた(図1)。

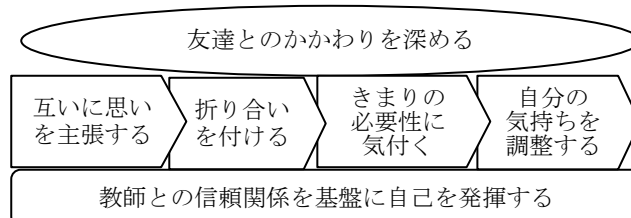


図1 幼児期の規範意識の形成の流れ

(2) 規範意識の芽生えを培う体験

「規範意識の芽生え」を培うために、幼児期に体験させたい内容を表した(図2)。

このように、幼児は、様々な体験を通して規範意識の大切さや必要性を感じていく。本研究では「協同的な遊び」の中で、「様々な感情体験」をさせていきたい。その中で、みんなで協力しながら教師や友達とのかかわりを深める。楽しく遊ぶためには、きまりを守る必要があることに気付かせていく。そうして楽しい体験を積み重ね、次第に自他の思いを大事にしながら気持ちを調整できるようにしたい。その際、規範に向かう心情や態度を育み、なぜ規範が必要なのか理解し、自ら納得して行動できるように援助を行うことが大切だと考える。

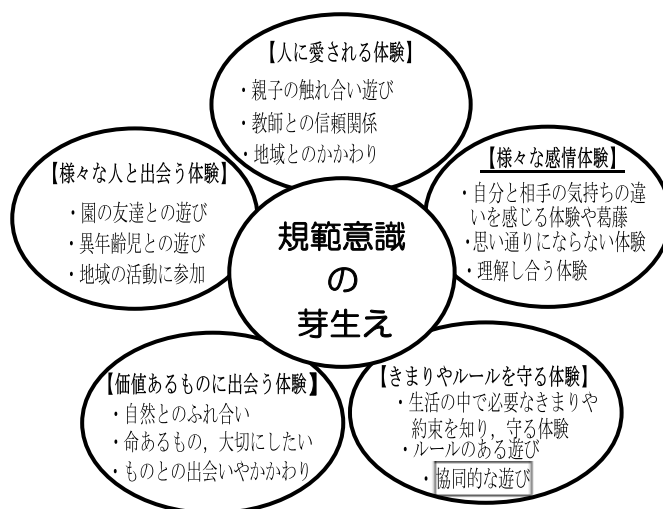


図2 規範意識の芽生えを培う体験
(全国国公立幼稚園長会リーフレット2010参照)

(3) 協同する経験の充実

① 協同する経験の過程

協同する経験とは、「個々の幼児が、人とのかわりを深めていく過程の中で、それぞれ自分の思いや個性を発揮できるようになり、他者の思いや個性に出会っていくという経験を重ねる。そこで共に取り組みたいことを見つけ、共通の願いや目的を見いだしていく。そして自分たちで生み出した『目的』に向けて、力を合わせ共に取り組んでいくという過程を意味しており、そこでの経験の充実こそが意味あるもの」と考えられている（「保育用語辞典」2011 一部修正）。

これは、教師が与えた目的だけではなく、幼児の主体性を大事にし、友達と一緒に活動する中で自ら目的を見いだすこと。それに向かって協力し、工夫しようとするということだと捉える。

幼児が、協同して遊ぶようになるためには、

自発性を基盤に「他の幼児と試行錯誤しながら活動を展開する楽しさや共通の目的が実現する喜びを味わうことができるようにすること」と教育要領の領域「人間関係」の内容(3)に示されている。このように、協同して遊びを展開していくために以下の過程を大切にする。

○集団のかかわりを通して楽しく遊び、共通の目的が生まれる過程

○試行錯誤しながらも一緒に実現に向かおうとする過程

○いざこざなど葛藤を乗り越えていく過程

その際、教師は、幼児一人一人の「人とのかわり」の違いを把握して適切な援助を行うようにする。そのために、「協同して遊ぶようになる過程」について、3つの時期で表す（図3）。年齢区別ではなく、幼児の発達は行きつ戻りつしながら進んでいると捉える。

発達時期	第Ⅰ期 初めての集団生活の中で様々な環境と出会う時期	第Ⅱ期 遊びが充実し自己を発揮する時期	第Ⅲ期 人間関係が深まり学び合いが可能となる時期
協同して遊ぶようになる過程・経験内容	協同する生活の体験 協同の基盤となる体験 協同する体験		
	○同じ場で見たり触れたり行為を模倣したりする。 ○場を共有し、つながり合う気分を味わう。 ○イメージの世界に浸り、感情を共有する。 ○友達の存在を、好意をもって受け入れようとする。 ○友達のしていることを感じながら個々の遊びを楽しむ。 ○経験したことを話す。 ○我慢しなければならないことに気付く。 ○きまりがあることを知る。	○場を共有し友達とかかわって遊ぶ楽しさを知る。 ○イメージや考えを伝え合い、表現する楽しさを味わう。 ○葛藤を乗り越え、友達と一緒に遊びをつくりだす。 ○友達と刺激し合いながら、自分の世界を広げる。 ○体験を深め、学級の友達と遊びの楽しさを共有する。 ○相手の思いや考えの違いに気付く、受け入れる。 ○きまりの必要性に気付く。	○目的を共有し、友達と相談したり折り合いをつけたりしながら遊びを進める。 ○新しいアイディアや遊びのきまりを生みだす。 ○グループや学級の中で、役割を意識して取り組む。 ○友達のよさや持ち味を感じながら、目的を実現し達成感を味わう。 ○様々な人とのかわりの中で刺激を受け、自分の見方や考えを広げる。 ○互いの思いや考えを出し合い、折り合いをつけながら遊びを進める。 ○きまりを守る必要性に気付く。
援助の視点	心の安定を図る援助の時期 ◎幼児一人一人の安定した居場所づくりと友達が意識できるようにしていく。	他児に気付けるような援助の時期 ◎自分と同じように、相手にも様々な思いがあるということに幼児自身が気付けるようにしていく。	幼児同士のかかわりを促す援助の時期 ◎友達とのかかわりが深められるように幼児の様子を見守り、幼児の達成感や充実感につながるようにしていく。

図3 協同して遊ぶようになる過程（全国国立大学付属学校連盟幼稚園会資料参照、追加修正）

② 協同する経験を充実させる劇づくり

これまでの遊びや生活の中でも協同的な活動は十分に含まれており、生活発表会を見通した劇づくりもその一つであると考えます。劇づくりを協同する経験を育む場として見直すと、教師主導ではなく、幼児が主体となって活動を展開することであり、教師はそれを支える役割をしていくことが求められる。

協同して劇づくりをしていくとは、幼児同士が単に一緒に活動を行うのではなく、一人一人が自分らしい動きや楽しみ方をして自己を発揮することである。同時に相手のよさに気付いて楽しさを共有し、そこに共通の劇の実現という目的が生まれ、工夫したり協力したりしていく。劇づくりは、こうした過程の中で、葛藤体験や互いに認め合う体験をし、協力することやきまりの必要性に気付きながら協同する喜びを味わえるものであると捉える。

このように、協同して劇づくりをしていくためには、共通の目的が生み出されるような体験を積み重ねていけるように活動を展開していく必要がある。

まず、幼児は体験したことを遊びに取り入れ「ごっこ遊び」として、ふりやつもりを楽しむ。また、絵本などからストーリーを共有して「劇遊び」を繰り広げていく。その遊びが他児にも伝わり、思いを伝えて遊びを共有していく中で協同の基礎となる社会性を身に付けていく。

しかし、仲の良い友達と過ごすだけでは人間関係が固定化してしまうため、協同する経験の充実としては不十分であると思われる。そこで、学級全体で「劇遊び」を取り上げ、みんなで遊ぶ楽しさを味わう体験を重ねながら、目的を共有していく。さらに、幼児同士が役や遊びのきまりをつくり、役割を分担しながら、協同して「劇づくり」を展開していく。

こうして、「劇づくり」までの体験をみんなで共有していくことで、幼児の主体性が生かされた「劇づくり」、つまり「協同する経験」となるであろうと捉える。その中で友達とかかわり、

様々な感情体験を重ね、自他の違いを認識し、思いを主張し合いながら気持ちを調整していく力が育まれていくのではないかと考える。

(4) 教師の援助について

「規範意識の芽生え」を培うためには、幼児と信頼関係を築くことが大切である。そこで、一人一人に応じる教師の姿勢について、幼稚園教育要領解説「人間関係」からまとめた(図4)。

発達に対する理解	内面の理解	心に寄り添う
1 関心を寄せる ・期待を持って見守る ・ありのままを認める ・思いを受け止める	2 心の動きに応答する ・心の動きを感じ取る ・共に心動かす ・知恵を出し合う	3 共に考える ・相手の立場になる ・サインを感じ取る ・考えや思いを大切に

図4 一人一人に応じる教師の姿勢

本研究の「協同する経験の充実」のためにも、上記のような姿勢で幼児と信頼関係を築き、幼児の「主体的な活動」を方向づけていくことが大切だと考える。「主体的な活動」は、「協同的な遊び」の土台となる。幼児が活動を通して「何を学んでいるのか」、「何を体験しているのか」を見とり「規範意識の芽生え」を培っていくため以下に留意して適切な援助をしていきたい。

- ・感情に任せて行動に結び付けるのではなく、状況を把握して、自分の考えを変えたり、行動を変えたりすること。気持ちを収めたり切り替えたりして気持ちを調整する方法を、時間をかけて気付かせ、知らせていく。
 - ・単にきまりを守らせることだけでなく、その必要性に気付き、理解させたうえで守ろうとする気持ちをもたせていくことを重視する。
 - ・集団の中で、友達と楽しく遊ぶためには、きまりが必要であることや、より楽しくするためにきまりをつくったり、変えたりすることもできると分かっているようにする。
- また、以下の点を踏まえ検証保育をしていく。
- ・一人一人の幼児の発達や実態を理解する。
 - ・集団(学級、グループ)関係を理解する。
 - ・実態に沿った指導計画を立てる。
 - ・見通しを持った指導を積み重ねる。

2 指導計画

(1) 幼児の実態把握

① 調査目的

幼児の実態を把握して、幼児理解につなげ、本研究の資料として役立てる。

② 調査方法

ア 質問紙法によるアンケート調査（記名）

(ア) 調査対象：室川幼稚園 1 組 20 名の保護者

(イ) 調査日：平成 23 年 11 月 8 日

(ウ) 回収率：95% (19 名)

イ ソシオメトリック・テスト

(ア) 調査対象：1 組男子 8 名女子 11 名計 19 名

(イ) 調査日：平成 23 年 9 月 2 日

③ 質問紙法によるアンケートの結果と考察

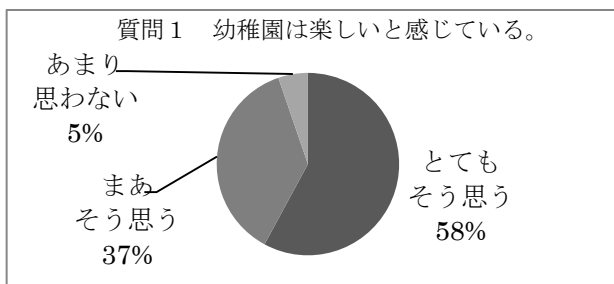


図 5 幼稚園は楽しいか

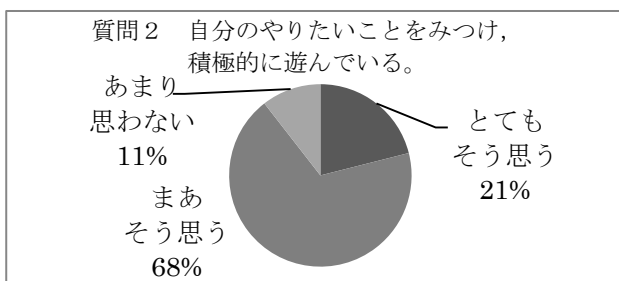


図 6 積極的に遊びに取り組んでいる

[質問 1・2 の考察]

ほとんどの子が幼稚園を楽しいと感じている様子で、自分のやりたい遊びに積極的に取り組んでいる。しかし、幼稚園をあまり楽しいと感じていない様子の子が 1 名、やりたい遊びが見つけられていないと思われる子が 2 名いることが分かった。

幼児を肯定的に受け止め、一人一人が安心して友達や教師と共に園生活を過ごす喜びを味わえるようにしたい。また、幼児が主体的に環境とかかわり、十分に活動し、充実感や満足感を味わうことができるようにしたい。

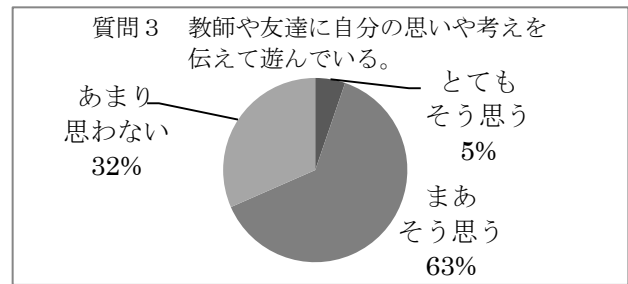


図 7 自分の思いや考えを伝えている

[質問 3 の考察]

約 7 割の子が、自分の気持ちを教師や友達に伝えられるのに対し、3 割を超える 6 名があまり伝えられないことが分かった。協同して遊びを進めていくためには、互いに思いを伝え合い、イメージを共有する必要がある。思いを伝え合える関係づくりや場の工夫が課題である。

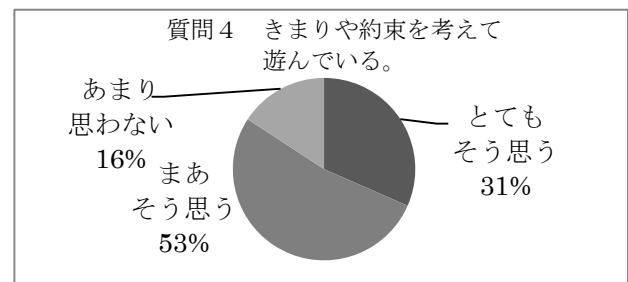


図 8 きまりや約束を考えて遊んでいる

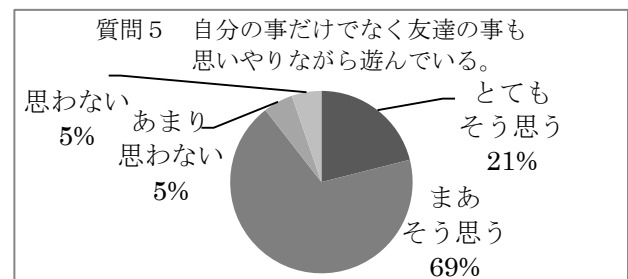


図 9 友達を思いやりながら遊んでいる

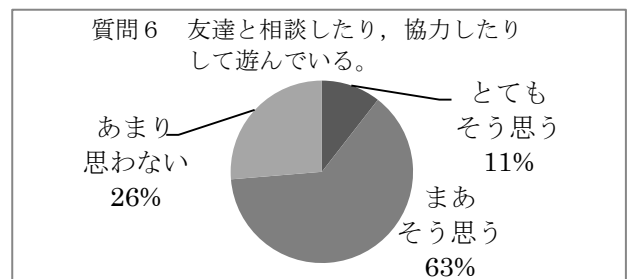


図 10 友達と相談したり協力したりして遊んでいる

[質問 4・5・6 の考察]

きまりを考えて遊んでいると思われる子が 8 割以上で、そうではない子が 3 名いる。

友達を思いやりながら遊んでいる子が 9 割い

るのに対し、友達と協力して遊んでいる子が7割程度で、3割近くの5名にはその様子が見られないことが分かった。仲良しの友達とのかかわりは深まってきているが、学級全体でのかかわり合いが不十分だと感じる。

協同して遊ぶ中で、互いのよさを認め、関係を深めながら、協力し合える学級づくりが必要であるとする。そして、みんなで楽しく遊ぶためにきまりが必要であると、体験を通して気付かせていきたい。

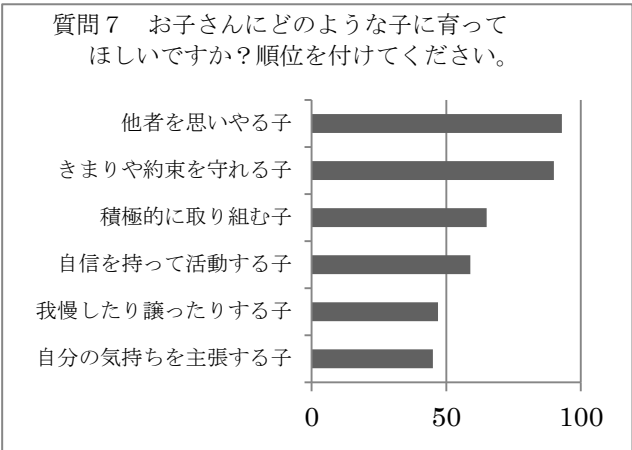


図11 どのような子に育ってほしいか

[質問7の考察]

保護者に、どのような子に育ってほしいかを6つの選択肢から選んでもらった。その結果、わが子に望んでいることの上位は、他者を思いやる子、きまりや約束を守れる子という道徳性と規範意識の両面である。また、「強くて優しい子」、「思いやりがある子」、「最低限のきまりを守れる子」なども記入されていた。このことから、保護者の願いと園の方針、本研究の目指す幼児像が一致していることが明らかになった。

④ ソシオメトリック・テスト結果と考察

ソシオメトリック・テストには、幼児にクラスメートの写真や名前を書かれたリストを見せて、どのくらい一緒に遊びたいかを評定してもらう「仲間評定法」と、好きなクラスメート「選択」と嫌いなクラスメート「排訴」を数名あげてもらう「仲間指名法」がある。個々の思いを聞くことで、学級での幼児の友達関係を知ることができ、かかわりを広げていく手掛かりとな

るテストだと考え取り入れた。

本研究では、友達とかかわりを深め、協力して遊びを進めていくにあたって、学級での仲間意識を把握するため、好きな友達を全員挙げてもらう「選択」だけを行った。

結果から、全員が友達から選ばれていることが分かった(図12)。2～4名しか選べなかった子が4名いるが、友達からは多く選ばれている。反対に、多くの友達を選んではいないが、乱暴な面が見られ、あまり選択されなかった子もいる。

少人数学級ということもあり男女の仲もよく、気の合う友達とのつながりを基盤に友達関係は広がりつつあるが、学級の仲間としてかかわりが深められるようにしていきたい。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	計
1	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	8
2	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	3
3	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	15
4	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	10
5	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	4
6	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	5
7	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	11
8	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	5
9	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	9
10	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	2
11	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	10
12	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	9
13	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	7
14	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	12
15	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	6
16	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	8
17	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	7
18	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	12
19	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	4
◎	7	1	8	6	3	3	3	4	3	2	6	2	2	7	6	3	4	6	2	
○	3	7	2	5	8	2	0	5	4	3	1	4	3	3	4	3	5	3	4	

- ・縦軸：選ぶ側 横軸：選ばれる側
- ・1～8は男児，9～19は女児
- ・横は選択した数の合計，縦は選択された数
- ◎は選択した友達からも選択された相互の関係
- は相手からのみ選択された数

図12 1組のソシオメトリックテストの結果(9/2実施)

⑤ 全体の考察

アンケートでは、規範意識にかかわる質問に対して、「まあそう思う」という保護者の回答が多かった。家族のかかわりの中で発揮されていることが、集団生活では十分ではないと考える。家庭と、園での幼児の姿に違いがあることを感じた。学級の幼児の実態からは、気持ちの調整ができず思いのままに行動する子の姿がある。

また、互いに思いを伝え合い、協力して取り組むことが難しいと考える。このことから、集団で「協同する経験」の充実を図ることが重要になると考える。友達とのかかわりを深めながら学級で劇づくりを取り入れ、協力することやきまりの必要性に気付かせていきたい。また、学級通信や保育参観、行事など様々な機会を通して保護者との連携を図り、共に幼児の成長を見

守っていけるように配慮したい。

アンケートの結果を踏まえ、以下の4点を保育実践に取り入れ、「協同する経験」の充実を図っていく。

- 協同する経験を充実させる援助の工夫
- 環境構成の工夫
- 伝え合う工夫
- 段階を踏まえた劇づくりの展開

(2) 指導計画の作成

「ごっこ遊び」、「劇遊び・劇づくり」、「生活発表会に向けて劇づくり」という段階で計画を立てる。

	回	活動	☆ねらい ○内容	◎教師の援助・環境構成
導入 ごっこ遊び (集団のかかわりを通して楽しく遊び、共通の目的が生まれる過程)	1	①海ごっこをする。 ・手遊びをする。 ・絵本を見る。 ・海の生き物になって、冒険する。 ②遊びを振り返る。 ・楽しかったこと、さらに楽しく遊ぶ方法	☆海に興味を持ち、友達や教師と表現しながらごっこ遊びをする楽しさを味わう。 ○海のイメージを膨らませながら自分なりに表現したり、友達と同じ動きをしたりする。 ○新聞を使い、教師や友達と一緒にダイナミックに遊ぶ。	◎海のイメージが湧くような環境を準備し、興味関心を持たせ、やりたいという気持ちにさせる。 ◎釣りごっこの経験や手遊び、絵本、冒険の話からイメージが広がるようにする。 ◎新聞を見立てて表現を楽しみ、破く・ちぎる・投げるなどしながら開放感を味わわせる。
	2	①海作りをする。 ・波や岩、海の生き物などを作る。 ②遊びを振り返る。 ・作ったものを紹介。 ・楽しかったこと、工夫したこと、協力していたことなどを話す。	☆友達や教師と考えを出し合い工夫したり、試したりしながら海づくりを楽しむ。 ○海ごっこに必要なものを友達や教師と工夫して作る。 ○考えたことや思ったことを友達に伝えたり、相手の思いを聞いたりして協力して作る。	◎イメージが形にできるような材料を準備して意欲を持たせていく。 ◎海ごっこに必要なものを話し合い、友達と協力しながら作ることができるようにコーナーを設定する。 ◎工夫したり協力して作っている場面を認め、他児にも気付かせ刺激となるようにしていく。
	3	①海ごっこをする。 ・波をくぐって遊ぶ。 ・音楽に合わせて海の生き物を表現する。 ・海で弁当を食べる。 ②遊びを振り返る。 ・どんな生き物になったのか、どんな動きが楽しかったか。	☆友達や教師と身体で表現したり、互いのイメージを共有したりして遊ぶ楽しさを味わう。 ○海の生き物になりきって、様々な動きを試してみる。 ○自分なりに表現したり、みんなで動きを合わせて表現したりする。 ○みんなで楽しく遊ぶ中で互いのよさに気付く。	◎生活と遊びの場をつなげ、イメージの世界とつながる面白さや心地よさを感じられるようにする。 ◎イメージを共有して遊ぶ楽しさを味わえるように、みんなで一緒に表現する場面も意図的に取り入れる。 ◎個々のイメージした動きや表現を取り上げ、他児にも気付かせてよさを認め合えるようにする。
	4	①海ごっこをする。 ・大型つみきやマルチパネルなどを取り入れて場を作る。 ・海の学校や生き物の家で遊ぶ。 ・曲に合わせて踊る。 ②遊びを振り返る。 ・困ったこと楽しかったことを伝える。	☆場や物を共有し、友達とかかわって遊ぶ楽しさを味わう。 ○気の合う友達と誘い合い、イメージを伝え合いながら海ごっこの場を作っていく。 ○思い通りにいかないことを経験しながら遊びを進める。 ○友達と刺激し合いながら自分の世界を広げる。 ○思いを共有し期待を持つ。	◎素材や用具を取り入れて遊ぶ中で、友達とのやり取りがうまれるように数や量を考えて準備する。 ◎いざこざが起こった時は、解決できるように見守り、必要に応じて仲介する。 ◎一人一人が遊び込む姿や友達とかかわって遊ぶ姿を見守ったり、遊びのつなぎ役をしたりする。 ◎幼児の気持ちを代弁したり、友達への思いの伝え方などを知らせたりする。

	5	①海のダンス大会。 ・色々な海の生き物になって踊る。 ・踊りを見せ合う。 ②遊びを振り返る。 ・友達のよかったところ。 ・認められた気持ち。	☆友達によさに気づき、一緒に活動する楽しさを味わう。 ○自分らしく踊ったり、友達の踊り見たり真似をして踊ったり、誘い合っ て、いろいろな生き物になって遊ぶ。 ○友達によさを見つけ、伝えたり認め たりする。	◎幼児自らいろいろな役に参加できる楽し い雰囲気を作り、恥ずかしがる子も自然 に参加できるようにする。 ◎踊りを見せ合う場を設け、互いによさに 気づき、言葉にして認め合えるように、 言葉を補い、思いをつないでいく。
展 開 劇遊び・劇づくり (試行錯誤しながらも一緒に実現に向かおうとする過程)	6・7	①劇遊び・劇づくりを する。 ・劇の内容を考える。 ・役を決める。 ・グループに分けれ、セ リフや踊りを考える。 ②遊びを振り返る。 ・互いによさを伝え合う。	☆グループの仲間と積極的にかかわり 楽しさを共感し合う。 ○劇の内容を考え共有する。 ○劇に登場する生き物を決め、自分が なりた役を選ぶ。 ○グループで考えを出し合いながらセ リフや踊りを考える。 ○触れ合い遊びで気持ちを通わせなが ら、力を合わせて遊ぶことを楽しむ。 ○グループで相談して目標を決め、協 力して絵にしたり発表したりする。 ○演じる姿を各グループで見せ合う。	◎絵本や海ごっこ、遊びなども取り入れ、 一人一人の思いや考えを受け止めなが ら、劇の大まかな流れを決め、遊ぶ中で 内容を変えていけるようにする。 ◎役決めは、幼児の主張や気持ちを受け止 め、役に対するイメージを話し合うなど、 自分で判断し、納得して決められるよう にする。気持ちの立て直しが必要な場合 は援助する。 ◎互いに思いを出しやすいグループの活動 も大事にし、仲間意識が高める。 ◎よさを認め合える発表の場を設ける。
	8 (11 ・ 12	①劇遊び・劇づくりを する。(全体で) 【中の場面】 「スイミーを元気づけ よう」 【初めの場面】 「波をつくろう」 【最後の場面】 「大きな魚を作る」 「サメ対大きな魚」 ②遊びを振り返る。 ・頑張っていることや友 達によさ、困っている ことや難しいところを 相談したり話し合う。	☆イメージを膨らませ協力して劇遊び をする楽しさを味わう。 ○役の気持ちを考えながら、なりきっ て劇遊びを楽しむ。 ○自分の考えが友達と違うことで葛藤 したりする。 ○思い通りにいかない場面で気持ちの 調整をする。 ○試行錯誤したり、協力したりしなが ら乗り越えていく。 ○イメージを絵にして共有する。 ○楽しく遊ぶためのきまりに気づき、 考えて行動し教え合う。 ○自分の思いを伝え、話し合い、みん なで解決しようとする。	◎幼児が自由に動く場面を作り、互いに意 識し考えて動いたり、並ぶ順番を決めた りする姿を見守る。 ◎協力の必要な場面を設定し、一人では得 られない遊びの面白さや、友達とやり遂 げる喜びを感じられるようにする。 ◎時間を確保し、葛藤する場面を大事にす る。また、話し合える場を作る。 ◎楽しく遊ぶためのきまりに気付いたり、 相手の思いに気付いたりして自分たちで 解決するよう見守り、必要に応じて援助 する。 ◎互いに主張し合う中で、折り合いをつけ て解決に向かうように、思いをつなげな がら方向づけていく。
まとめ 葛藤体験を乗り越えていく過程 発表会に向けて劇づくり(こまごまや)	13	①劇遊びを見せる。 ・劇を通す。 ・年中児に観賞させる。 ②劇を振り返る。 ・観客の前で演じた感想、 気づいたことなど。	☆協力して演じる喜びを味わう。 ○友達の思いも受け入れ、自分の気持 ちを調整しながら、動きを合わせて 劇を展開する。 ○観客のいる前で劇を演じる楽しさを 味わう。	◎幼児の思いを聞き、動きを見たりしなが ら演技に取り入れていく。 ◎みんなで楽しく進めるためにどう動いた らいいか、必要に応じて援助する。 ◎年中児が、喜ぶ姿を見て、演じる喜びを味 わえるようにする。
	14・15・16	①繰り返し演じる。 ・観客の前で演じる。 ・互いの学級で演目を見 合う。 ・演じ方を話し合う。 ②小道具を作る。(面や衣 装など) ③劇を振り返る ・互いのよかったところ。 ・生活発表会に向けての 思いを伝えあう。	☆発表会に向けて協力して劇を進める 楽しさを味わう。 ○観客側の立場になって、話し方や立 ち位置、演じ方などを決めていく。 ○互いの動きを見ながら考えて動いた り演じたりする。 ○小道具の必要性を感じて作る。 ○思ったことや感じた事、気付いたこ とを伝え、互いによさを認め合う。 ○自分たちの生活発表会だという気持 ちで取り組む。	◎観客として、他の学級の演目を見せたり、 保育者が演じる姿を見せたりすること で、どうしたら観客に伝わるか、喜んで もらえるか気付かせ、考えさせていく。 ◎自分の気持ちを調整しながら、友達と協 力している姿を認めていく。 ◎小道具は演技を助ける役割をしているこ とに気付かせ、自分たちで作れるよう材 料を準備しておく。 ◎発表会を楽しみにしている気持ちや緊張 不安な気持ちを受け止める。

17	①生活発表会をする。 ・劇を披露する。 ②発表会を振り返る。 ・保護者から感想を聞く。 ・気持ちを伝え合い喜びを共感する。	☆みんなで力を合わせて劇をやりとげる達成感や、満足感を味わう。 ○助け合い、協力して進める。 ○自信を持って演じる。 ○劇を最後まで演じ成功させた喜びをみんなで味わう。	◎緊張をほぐしながら、劇を楽しむこと、助け合うことを確認して、みんなで協力し、自信をもって演じられるようにする。 ◎力が発揮できるよう励ます。 ◎保護者を交えた振り返りで、成長を認め合い、喜びや達成感、自信につなげる。
----	---	---	---

3 保育実践

「協同する経験」を通して「規範意識の芽生え」を培うために、「劇づくり」に取り組む。

そこで、協同する遊びが充実していけるよう以下の4点に留意して実践する。

(1) 協同する経験を充実させる援助の工夫

兵庫県教育委員会指導の手引「人とのかわりを豊かにする教育の推進」(2010)によると、「協同する経験」を通して以下の3つ力が関連して育つとされている。

○遊びを工夫する力(思考力の芽生え)

○きまりに気付き守る力(規範意識の芽生え)

○言葉で伝え合う力(言葉による伝え合い)

そこで、これらの力を育む援助のポイントを押さえて実践する。

① 遊びを工夫する力を育む援助

ア 友達と一緒に遊ぶことで味わえる楽しさや喜びを存分に体感させる。それが遊びを工夫しようとする原動力になる。

イ かかわる人数が多くなると、幼児だけでは共通理解を図ることが難しくなる。そこで、話し合う場を意図的に設定し、互いの思いを伝えたり考えを出し合ったり、イメージを具体化していけるようにする。

ウ 遊びを活性化させるため、力を合わせないと成し遂げられないような目標をタイミングよく捉え、導入する。

② きまりに気付き守る力を育む援助

ア 幼児に任せ、「やろう」とする姿を見守り、試行錯誤やいざこざが起こったときは最終的に「やってよかった」「楽しかった」という経験につなげていく援助をする。

イ 互いに主張し合い、折り合いをつける体験を通して、相手にも自分と同じような思いがあることに気付くよう個に応じた対応をする。

ウ きまりがあること、守ることで楽しく遊べることに気付かせていく。また、分かるように表現して理解させていく。

エ 教材の数や量を調整して準備し、幼児同士のやりとりが生まれるようにする。

③ 言葉で伝え合う力を育む援助

ア 幼児同士が話し合っている様子から、理解しているかを把握し、分かり合って遊びを進めていけるように互いの思いや言葉をつないでいくようにする。

イ 自分の考えを言葉で表現したり、他者の言葉にじっくり耳を傾けたりして、幼児同士の思いが共有できるような「振り返りの場」を設定する。

ウ 発言を受け止め、全体で理解し合えるよう言葉を補ったり視覚で訴えたりするなど、意識してそれぞれの思いをつなげる。

エ 遊びの中で友達によさに気付き、また、認められることで友達とつながるきっかけとなる。よさも、困ったことも共有し合えるような「話し合いの場」を設定する。

(2) 環境構成の工夫

幼児が意欲をもって、主体的に活動を展開することができるような環境を整える。

① 状況をつくる

幼児が、安心して環境にかかわれる雰囲気を作っていく。そのうえで、かかわれずにはられないような、活動が展開していくような環境をつくっていく。

② 幼児の活動に沿って環境を構成する

教師がすべて環境を準備しお膳立てをしてしまうのではなく、活動の流れに沿って幼児の視点で考える。そして、幼児が実現したいことを捉え、思いやイメージを生かしながら共に環境を構成していく。

(3) 伝え合う工夫

「規範意識の芽生え」を培うためには、思いを主張し合うことが大切である。また、協同する経験の充実には、互いの思いを共有していかなければならない。そこで伝え合う力を育むことが必要となる。以下の点から伝え合うための工夫を図る。

① 振り返りの場工夫

ア 学級づくり

日々の保育では、活動と「学級の目標」をつなげて振り返る。みんなで決めた目標を常に意識して共に向かっていくことで学級の一員としての意識を高める場とする。

イ 話しやすい場づくり

幼児の表情や仕草、雰囲気などから、幼児なりの表現する言葉、言葉にならない言葉、心の中の言葉を大切に受け止め、思いをつないでいくようにする。

ウ 刺激し合える場づくり

友達や教師の活動の話(感情体験)や表現(作品紹介・踊り・手遊びなど)から刺激を受け、考え方や、判断の仕方、表現の仕方などに気付けるようにする。

エ 共感し認め合える場づくり

遊びの中で感じたことを伝える場から、徐々に互いの体験や思いを共有できる場にしていく。その中で友達の思いやよさに気付いたり、認め合ったりしていけるようにする。

オ 規範意識の芽生え

いざこざや葛藤、試行錯誤する中での気付きから課題を見つけ、共に考えを出し合い、解決に向かう場にする。

② 話し合いの工夫

イメージや話の内容を共有できるように、絵や文字にして話し合う。また、実際に演じてみたり、幼児に演じてもらったりしながら、自分に置き換えて理解できるようにする。

活動の中で課題を抱えたとき、どのような点で行き詰っているのかを把握し、未解決で遊びが途絶えてしまわないようにする。また、幼児

の意見を大事に受け止め、活動が目的に向かうように配慮する。

以上の2点を踏まえ、話し合いの工夫を図る。

③ 伝え合いを育む工夫(表2, 図14)

「劇づくり」での振り返りや話し合いを方向づけたり、みんなで共有したり、意識させていくために以下の視点に名前をつけ表示する。

表2 話の視点

「楽しかったこと」(自己理解) ハッピー
「友達のいいところ」(他者理解) みつけ
「困ったこと」(気づき, 課題) こまったくん
「こうしよう」(思考) ひらめきさん 

また、その内容を「カード」にして掲示し、意識させていくことで活動を展開していく意欲となるようにする。また、保護者にも伝えることで幼児の活動の過程を知らせていく。

④ 話し方・聞き方の援助の工夫

ア 声のおおきさ(図15)

これまでは、個々が話しやすい場づくりを意識してきた。二学期になり、行事などで司会の経験もする中で、場や状況に応じた声の大きさについて考える機会を設ける。小学校で使われている「こえのものさし表」を参考に、幼児用に修正して掲示し意識させていく。

イ 聞き方名人(図16)

これまで、楽しいと感じられる集まりの持ち方(手遊びや指人形を使うなど)、話の内容や時間を考え、聞きたくなるような場づくりをしてきた。2学期からは発達を考え、「話す人の気持ち」になって「聞く姿勢」について考え約束をきめる。話を進める中で意識させていきたい。

ウ 座り方

(ア) 前向き型

前向き型は、教師が全体を把握しながらみんなで考えたことをまとめ、共通理解し、確認したりしていく場合や幼児が発表する場合など、みんなで集中して聞きやすいと考える。しかし、教師と幼児の関係だけになりやすいことに注意する。

(4) 円座

円座は、教師と幼児、幼児同士、互いに顔が見合え、表情から相手の気持ちを察したりできる。また、温かい雰囲気では伝え合いができると考える。ただし、一人一人の聞く姿勢が整っていないなかったり、人数が増したりすると共通理解が難しいと思われる。その場合は、教師は全体を把握しにくいいため注意する。

(4) 劇づくりの展開

幼児の活動を捉える際、教師の期待した方向に向いているかだけでなく、活動の過程で幼児自身が充実感や満足感を得ているかに重点を置く。どれだけできたかなど結果だけではなく、活動の過程の中で以下のような体験を大事にし、協同する経験を重ねさせていく。

- ・ 楽しい、悔しい、嬉しいなど多様な感情体験や自己を発揮し認められる体験
- ・ 思い通りにならない葛藤やつまずきの体験
- ・ 思いを主張し合い折り合いをつける体験
- ・ 活動を楽しみ、共感し合う体験
- ・ 目的に向かって力を合わせてやり遂げる体験

幼児は、このような体験の中で、「規範意識の芽生え」につながる学びをしていく。そこで、「規範意識の芽生え」を培う視点から、劇づくりの流れを位置づけた(図13)。

① 「ごっこ遊び」を盛り上げる

この段階は、集団のかかわりを通して楽しく遊び、共通の目的が生まれる過程と捉える。

学級では、夏休みの経験から始まった「釣りごっこ」が継続している。幼児の遊びをヒントに「海ごっこ」に興味を持たせ、幼児が自己を発揮しながら、友達との違いやよさに気付いて遊びを楽しめるようにしていく。

初めは教師が魅力ある環境を作り、ダイナミックに遊びを盛り上げることで、一緒に遊ぶ楽しさや遊びに対する意欲を持たせていく。また、幼児と「海」のイメージを膨らませ、共に環境をつくる。そして、幼児が気の合う友達と自らかかわりながら十分に遊ぶ時間を確保していく。

② 「劇遊び・劇づくり」へ発展させる

この段階は、試行錯誤しながらも一緒に実現に向かおうとする過程と捉える。

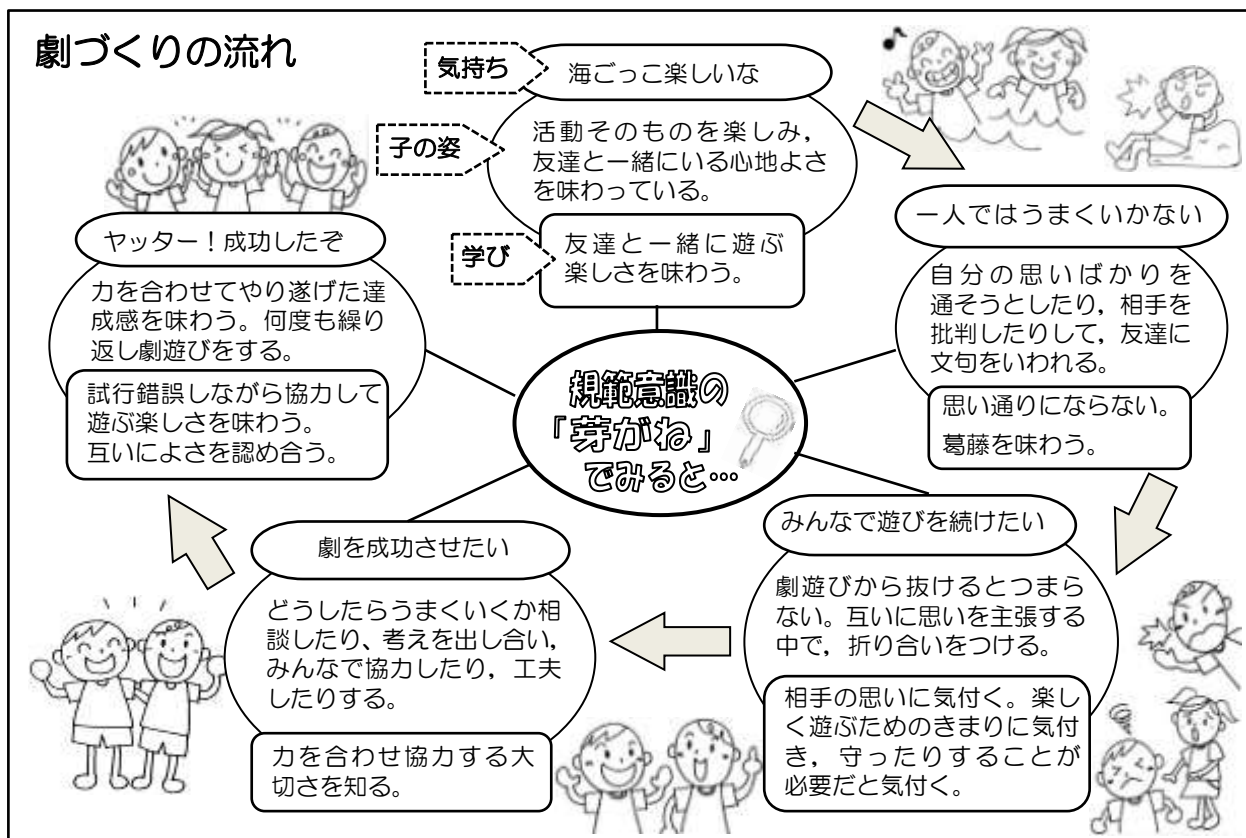


図13 劇づくりの流れ (全国国公立幼稚園長会リーフレット2010形式参照)

絵本から「劇遊び」を始めている幼児たちの活動を学級で共有し、イメージを膨らませながら「劇遊び」をしていく。初めから見せることを意識させず、いろいろな役になりきり、みんなで劇遊びをする楽しさを味わえるようにする。

次に、配役や遊びのきまりをつくったり役割を分担したりしながら「劇づくり」をしていく。劇の内容は、遊びがきっかけとなることから、日常の歌やリズムを取り入れ、生活と組み合わせ、絵本を土台に幼児と共に考えていく。

グループから学級へと友達関係を広げながら「劇遊び」をしていく中で、互いに思いを主張し、折り合いをつけながら、楽しく遊ぶためのきまりに気づき気持ちを調整していけるようにする。また、目標をもたせ、力を合わせるこ

が必要な状況を設定し、様々な感情体験を経験させながら「劇づくり」をしていく。共通の目的に向かって試行錯誤しながらみんなで工夫したり協力したりして進めていくことで充実感を味わえるようにする。

③ 「生活発表会に向けた劇づくり」へ

この段階は、いざこざなど葛藤を乗り越えていく過程と捉える。

参観者を意識し、喜んでもらうためにどうしたらいいか、劇の内容を伝えるためにどう動いたらいいかなど、見る側になって劇づくりをしていく。生活発表会で披露することで表現する喜びや達成感、満足感を味わい、認められることで自信につながると考える。

Ⅶ 指導の実例

1 実践事例



図 14 伝え合いを育む工夫



図 15 声の大きさ

場や状況を設定し、どのくらいの声で話せばいいのか実際にやってみる。



図 16 聞き方名人

「こんなふうに聞いてくれると嬉しい。」話し手の気持ちについて、話し合った内容も一緒に掲示する。

(1) ごっこ遊び「集団のかかわりを通し楽しく遊び、共通の目的をみつける過程」【第1時～第5時】

① 海ごっこ (○活動の流れや幼児の様子、◎教師の援助)



写真 1 海ごっこ



写真 2 海を作ろう

「スイミー」の話をもとに、みんなで海へ冒険に出かける。新聞を変身させながら、いろいろな動きを楽しむ。破いたり、ちぎったり、投げたりしながら開放感を味わっている。

仲良しの友達同士で、分担しながら作っている。「俺の岩どう?」「いいね」とやりとりを楽しみながら岩や波、魚などを作っている。



写真 3 みんなで楽しく遊ぼう

みんなで表現する活動も入れながら、友達とかかわって遊ぶ楽しさを味わわせていく。

友達と相談しながら遊びに必要なものを集めたり、協力して作ったりしている。

写真

写真4 海の学校で遊ぼう

表3 「俺たちの波だから」

海の学校では、小部屋や道など自分たちで場を作っている。
スイミーになったり、サメになったりして友達と楽しんでいる。

事例1-1 【俺たちの波だから】

教材の数を調整して準備し、幼児がやり取りをしながら遊びを進めていく様子を見守る。

- 「海の学校」で波（新聞）をすべて自分たちのサメの家につめ込んだA児。周りの子が「少し分けて」というが、「波がないとサメは生きられないから」と主張。何とか交渉しようと「魚もこまるよ」「多いから少し分けて」と周りは伝えるが、A児は聞く耳をもたない。
- 一緒に遊んでいたC児がみんなに新聞を分け始めた。A児に止められるが、「向こうが少ないからいいさ」と続けた。A児は怒って一人になる。
- ◎話し合いを通して友達の気持ちの切り替え方や行動の仕方から気付かせていくようにした。
- 振り返りの場で、女の子達は、「サメと魚は仲が悪いから、波を買いに行ってきた」と、気持ちを切り替え、新聞を取りに行ったことを伝える。みんなから拍手が出た。
- C児は、波を分けた友達から感謝された。A児は、「みんなで分け合う」ことも必要だったと気付いた様子。何より、仲間のC児が味方になってくれず淋しかったようである。

表4 「B児の気持ち」

事例1-2 【B児の気持ち】

- 振り返りの場に入ろうとしないB児（写真5）。遠くから話を聞いたり、時々反応したりしながら近づいてきている。
- ◎話に興味を持っている様子。「海ごっこ」や「ダンス大会」で気持ちが高まり、じっとしていただけないと思われる。落ち着くのを待ち声をかけた。
- 「座りたいけど、体が言うことをきかない」と話すB児。周りも共感するが、「心を強くして我慢すればいい」と自分で気持ちを調整していることを伝えていた。
- ◎周りで待つ他児に配慮し、理解を得ながら、B児の気持ちも受け止め、見守っていく。

写真

写真5 海ごっこを振り返る

始めはB児の行動に苛立ったり、まねしたりする子がいたが、話し合いを通し、B児の思いを聞いたり、一緒に遊ぶ中で理解し、認め合うようになった。まわりが認めてくれたことで、少しずつ振り返りの場にも参加するようになる。気持ちの調整には、時間がかかるが、長期的に見守っていく。

(2) 劇づくり・劇遊び「試行錯誤しながらも一緒に実現に向かおうとする過程」【第6時～第12時】

① グループ（役ごと）で協力しよう

表5 「順番があるからね」

事例2-1 【順番があるからね】

少人数のグループで伝え合い、思いを共有して活動する場を設定する。

- グループで役の目標を話し合い、共有していくために、絵や言葉にして表現していく。
- 各グループそれぞれきまりがあり、取り組み方、表現の仕方が様々であった。
- クラゲグループは、色塗りの順番を決め、交代して虹色のクラゲを仕上げていた。その中で「まだ？私も早く色を塗りたい！」という声に対し「少しまって。〇〇は□□の次だからね」と、見通しをもたせて説明する姿も見られた。
- ◎発表時、各グループの取り組む過程を伝えてもらいながら互いの刺激となるようにした。

写真

少人数グループで、互いに意見を伝え合っている。相手の意見も聞きながら話し合う姿がみられる。

写真6 グループで話し合う



写真7 各グループの目標

表6 「やった！」

事例2-2 【やった！】

友達のよさに気付き、認め合えるよう振り返りの場を設ける。

- 各グループ目標を意識して、セリフや踊りを仕上げていく中、エビグループは、なかなか踊りが決まらない。歌の歌詞が照れくさかったようである。
- 他のグループは、「フワフワダンス、クラゲに似合っている」「カニは強そう」「シンバルが本物のカイみたい」「サメかっこいい」「スイミー声が大きくなった」と認められ「みっけ」のカードに掲示されている（写真7下）。
- ◎どのグループも、自分の目標にむかって、役になりきっているためだと気付かせたい。
- みんなの目標を確認する（写真7）。

エビグループの目標は「かわいいエビちゃんになりたい。スイミーをダンスで応援したい」だった。

- ◎自分たちでやり遂げる達成感が味わえるように、試行錯誤して取り組む様子を見守る。
- 振り返りの場で、エビグループの変化に気付いた子が「エビちゃんのダンスがかわいくなっていました」と認めてくれた。「ありがとう！」顔を抑え喜びいっぱいの表情を浮かべた。「スイミーのために繰り返しがんばっていたね」とこれまでの過程を認め、みんなに伝える。「Dさんの踊りがよかったからみんなで真似することになったよ」と互いのよさを認め合っていた。

② 学級全体で力を合わせよう

表7 「波を成功させたい」

事例2-3 【波を成功させたい】

学級で力を合わせて取り組める場として、「海ごっこ」で表現した「波」を意図的に導入し、劇に取り入れる。

- 海ごっこで、手を順番に動かしていったことを思い出しながら表現していくと「手だけだと波に見えない」ことに気付き、「大きく動けばいい」「しゃがむ？」「腕をくむほうがいい」と波の動きが決まってきた。
- 波を表現するため横一列に並ぶが、海ごっこの時のような円ではないため、自分たちの動きが分からない。
- ◎互いの動きをみながら波がつかれるようにアーチ形を提案し、試行錯誤する様子を見守る。
- 相手の動きが見えるようになると、互いに感じたことを伝えながら、「成功させたい」と試行錯誤を続けた。
- ◎共通理解をするため、困ったことや解決の方法を話し合い、「ひらめき」をカードにして掲示する（写真8）。
- 遊びを繰り返すうちに、互いに意識して動くようになる。また、「きれいな虹のような波を作りたい」「身長順にするといい」と意見がでて、並び方も意識し始めた。しかし、自由なほうがいいという子もいて、互いに主張し合い、折り合いをつけながら進めようとしていた。

《波を成功させるには》

- ・先頭が座って隣が座るまで待つ。
- ・しっかり腕を組む。
- ・下までしゃがむ。



写真8 話し合った解決策

- 初めて成功した時、見守っていたサメグループから歓声が起こり、「すごい波だ！」と認めてもらった。

- ※「ひらめき」カードに記入し掲示。
- ※サメからの「みっけ」もつなげる。

- ◎気持ちの調整が難しい場合は、互いの思いをつなぎながら、個々に応じて援助する。
- ◎待っている子の気持ちにも気付かせ、配慮する。

並ばないときれいな波できないよ。

ここがいい！



写真9 波作りで試行錯誤

身長比べよう。○が大きいから交代ね。



写真10 個々に応じて話し合う

表8 「わかれて隠れよう」

事例2-4 【わかれて隠れよう】

やり取りを楽しませるために、幼児に任せていた場面の中で、赤い魚の隠れ場が問題になった。

○二つの岩のうち一つを自分の岩だと決め、「俺たちの岩だから向こうに隠れて！」と、A児は仲良しの友達以外の子を入れようとしなない。

○他の子は不満そうだが、A児に何も言わずに、もう一つの岩にかたまって隠れた。

◎改善の必要を感じるまで見守る。

○振り返りの場で、E児が「隠れる時、みんながいっぱいで狭い。苦しくなる」と困っていることを訴えた。同じ気持ちの他児も伝え始めた。

◎相手の思いに気付き、解決方法を見つけていけるように、話し合いを進め、方向づけていく。

教師「みんなで隠れると岩が狭いと感じたのね。」

A児「俺たちのところは狭くなかったよ。」

教師「E児達のほうは、狭くて困っていたみたいだよ。どうしたらいいかな。『ひらめきさん』ある？」

A児「多い時は同じくらいに分かれればいいさ。」

教師「そうすれば、ゆったり隠れられるね。みんなどう思う？」

「それがいい」「二つに分かれる方がいい。」

E児「A児ありがとう。」

◎E児が気付いて話してくれたことで、A児が解決法を考えられたということに気付かせ、伝え合うことが必要だと感じさせていく。

表9 「活動の見とり」

事例2-5 【活動の見とり】

◎「大きな魚」を幼児がどう考えるか。以下のように予想をたて、準備をした。

- ・大きな段ボールで形を作りみんなで持つ。
- ・画用紙など一人一人が持って形を作る。
- ・サメのように大きな船のようなものを作る。
- ・組体操のように重なって魚に見せる。

しかし、予想は外れた。これまで幼児は、遊びとして役になりきって演じてきた。幼児にとっては、外からの見た目ではなく、自分がどうなりきるかであった。そして、物語から感じ取っていた「一緒に泳ぐ」⇒「つながる」⇒「一つの魚になる」というイメージで、みんなが一致して縦に並び肩に手を置いた。

設計図になるであろうと考えていた「大きな魚の絵」(写真 16)も、幼児の思い描いたスイミーの世界だった。

幼児の思いを「生活発表会」でも生かすためにどう援助していくか。

◎自分たちだけでなく、参観者も楽しませるにはどうしたらいいか話し合う。

◎一列になる時、相手からどう見えるのか並び方次第で魚に見えると気付かせる。

◎一人一人が大事な役割を果たしていることを確認し合う。

◎サメとの対決の仕方は、劇遊びを繰り返しながら動きを考えていく。

(3) 発表会に向けた劇づくり「いざこざなど葛藤を乗り越えていく過程」【第13時～第17時】

劇遊びを通して、試行錯誤を繰り返し、葛藤体験を乗り越えていく中で、みんなで楽しく進めたいという気持ちが高まっている。また、各学級で見せ合った体験から、人前で演じる楽しさも味わっている。「生活発表会」を意識し始め、保護者に劇を見せたい、喜ばせたいという気持ちが増している。

○発表会が近づくと、振り返りの場で、「あと○日で発表会なので、がんばりましょう」と投げかける子が出はじめ、発表会に向けて、学級の気持ちも高まっていった。

○これまで、劇遊びでは思い切り表現できるように、教師が立ち位置などを決めず幼児に任せてきた。劇遊びを繰り返す中で、どう動けばいいのか状況を判断して広がり、周りと合わせようと考えて動く様子がみられた。さらに「劇を楽しむ」から「人を楽しませたい」という気持ちに変化してきたことで、好きなように言っていたセリフもみんなで一つに合わせ声そろえていた。話し合いに取り上げなかった場面でも、互いを意識しながら合わせたり、動いたりする様子が見られた。

○演じることに自信がつき、友達と主張し合える関係になると、劇を保護者に見せたい気持ちから、立ち位置や並ぶ順番でいざこざになることがあった。互いに同じ思いであることを感じると、折り合いをつけ、納得しながら順番を決めたりして、協力して演じていた。

○「生活発表会」の後、保護者を交えての振り返りの場では、保護者と共に伝え合い、成長を認め合える場となった。いつもより長い時間であったが、みんな顔をあげて聞き入っていた。B児も教師の側で、最後まで相槌を打ちながら聞いていた。

<演技直後の幼児の声>

「心がつながっているみたいだったね」「楽しかった」「俺、泣きそうになった」「もう一回やりたい」

2 公開検証保育指導案

公開検証保育指導案

平成 23 年 12 月 8 日（木）
沖縄市立室川幼稚園 1 組
男 9 名 女 11 名 計 20 名
保育者 大城 久枝

(1) 活動名

「みんなで協力して劇づくりをしよう！」(17 時間)

(2) 教材名

劇づくり（絵本「スイミー」）

(3) 活動の目標（「協同する経験」の視点から）

共通の目的に向かって考えを出し合いながら協力して劇づくりに取り組もうとする。

- ① 友達とアイディアを出したり工夫したり役割を分担しながら劇づくりを進めようとする。
- ② みんなで楽しく活動していくためには、きまりや約束を守ることが必要であることに気付く。
- ③ 互いの思いや考えを伝え合い、折り合いをつけながら遊ぶことができる。

（①遊びを工夫する力，②きまりに気付き守る力，③言葉で伝え合う力）

(4) 活動領域「人間関係」のねらい

○幼稚園生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう。[人間関係(1)]

○身近な人と親しみ、かかわりを深め、愛情や信頼感をもつ。[人間関係(2)]

○社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける。[人間関係(3)]

(5) 活動時における幼児を見とる視点

表 10 幼児を見とる視点

	幼児の発達する姿	援助の援助
A	① 友達とアイディアを出し合い、相談したり協力したりしながら、自分の役割を考えて遊びを進めている。 ② みんなで楽しく活動するためのきまりを考えて行動しようとしている。 ③ 思いや考えを主張し、相手の気持ちに気付きながら折り合いを付けて遊んでいる。	視点① 遊びを工夫する力（思考力の芽生え） 視点② きまりに気付き守る力（規範意識の芽生え） 視点③ 言葉で伝え合う力（言葉による伝え合い） 援助 A・自分たちで劇遊びを進め、やり遂げようとする気持ちを見守りながら、必要に応じて援助する。 B・友達の思いや状況に気付けるように援助する。 ・遊びに加わり、幼児同士の思いをつなげる。 ・きまりがあることで、楽しく遊べることに気付けるようにしていく。 C・自分なりにやってみようとする姿を認め、自信につなげていく。 ・楽しく遊ぶ中で、必要なきまりがあることを機会と捉えて気付かせ、理解できるように伝える。 ・気持ちを代弁したり伝え方を知らせたりして、伝わる喜びを感じさせていく。
B	① 友達と思いや考えがぶつかり葛藤したり、試行錯誤したりしながら遊んでいる。 ② きまりを守って遊ぶ楽しさを感じてきている。 ③ 考えたことや思ったことを伝えて遊んでいる。	
C	① 友達のしていることに興味をもち、真似をして遊んだり、自分なりにやってみたりしている。 ② きまりがあることや我慢しなければならないことに気付いてきている。 ③ 思いを言葉やしぐさ、態度で表そうとしている。	

(6) 活動設定の理由

① 教材観

劇遊びづくりは、絵本の読み聞かせ、ごっこ遊びなどから展開してきた劇遊びを計画的に取り入れた活動で、幼児が目的を見出して実現していこうとする協同的な遊びであると考え。

劇づくりで「協同する経験」を通して、幼児が友達や教師とかかわりを深め、楽しい経験を重ねていくことは、きまりを守ろうとする土台となる。みんなで遊びを続けたいという思いが、きまりの必要性に気付くきっかけとなり、気持ちを調整して守ろうとする意欲につながっていくと考える。

「スイミー」の絵本は、子どもたちが好きな絵本の一つで、何度か読み聞かせを行っている。絵本の内容とこれまでの経験から場を共有しイメージを膨らませる取り組みをすることで、友達とつながり合う喜びを感じることができるだろう。また、生活とつなげながら、主体活動の中でも幼児が遊びを発展させ楽しむことができると考える。劇遊びでは、小集団で相談したり、アイディアを出し合ったり役割を考えて協力して進めることができる。その中で、役の気持ちになって考えたりすることで、互いのイメージを伝え合い、共有して表現する楽しさを味わうことができるだろう。さらに、みんなで力を合わせる場面や葛藤場面では、幼児が試行錯誤しながら活動を展開する。また、課題を見つけ、必要な手順や約束、きまりなどを考えたりして協力していける教材だと思われる。

② 幼児観

学級の実態としては、好奇心旺盛で自分の好きなことに夢中になって遊ぶ子が多い。しかし、自分の思いばかりを主張して相手の気持ちに気付かず、話を最後まで聞けない子がいる。その反面、自分の思いや考えを言葉で伝えるのが苦手な子が3割以上いる。また、集団生活のきまりは知っているが、学級活動の中で、思いのままに行動して活動から抜けてしまう子の姿も見られる。

協同して遊ぶためには、互いに思いを主張し合い、折り合いをつけたり、気持ちを調整したりしながら活動を展開していかなければならない。友達と対等の関係を築けるようかかわりを深め、一人一人が自己を発揮し、協力し合える学級づくりが課題である。

③ 指導観

協同して遊ぶ基盤として、まず、幼児の心に寄り添い、ありのままを認めて信頼関係を築く。また、学級集団で一人一人のよさが生かされるように、安心して自己を発揮できるような場の設定や雰囲気づくりを心掛ける。

「ごっこ遊び」では、開放感を味わいながら、ダイナミックに遊び自己を表現して遊ぶ楽しさを感じられるように環境の工夫を図る。また、友達の思いやよさに気付いたり、互いに認め合ったりできる伝え合う場を設定し、一緒に活動する楽しさが味わえるようにする。

「劇遊び・劇づくり」では、学級で目的を共有しながら、考えを出し合い、折り合いをつけながら楽しく劇遊びを進めていけるように見守っていく。また、劇の内容を一緒に考え工夫し、役割を分担できるように援助していく。その中で、みんなで力を合わせるが必要な状況を意図的に作り、試行錯誤しながら協力して活動を展開していけるように配慮していく。

「生活発表会に向けての劇づくり」では、参観者を楽しませる方法を考え演じていく。生活発表会では、やり遂げる達成感や充実感を味わうことにより、学級の絆も強くなると考える。

遊びの中でいざこざや葛藤が起きたときは、学びの機会と捉え、幼児同士解決していけるように見守ったり、思いを受けとめ援助したりする。また、みんなで楽しく過ごすためにどうしたらいいか、学級全体で話し合い、共有し解決していけるようにする。

学級で話し合った「楽しかったこと」、「友達のいいところ」、「こまったこと」、「ひらめいたこと」を魚カードに記入して掲示することで、みんなで共有し意識していけるようにする。学級だよりや参観日などで家庭へも知らせることで、活動の過程や幼児の思いを知らせることもできると考える。

本活動では、幼児が「スイミー」を土台とした劇づくりを通して、協同する経験を重ね、友達との関係を深めていくことで規範意識の芽生えを培い、自分の気持ちを調整しながら友達と協力して遊びや生活を進める子を育みたい。その際、幼児をみとる視点として、①遊びを工夫する力、②きまりに気付き守る力、③言葉で伝え合う力がどのように育まれていくかを見取することで、協同する経験を理解し、適切な援助を行うことができると考える。

(7) 本時の展開 (12/17 時間)

活動名	サメ対大きな魚		
幼児の姿	・役になりきって、自分なりの動きや言葉で表現したり、友達とのやり取りを楽しんだりしながら夢中になって劇遊びをしている姿が見られる。 ・役の仲間と相談して、活動の手順や約束を考えて進めるグループがある。 ・みんなで動く場面で、感情のままに動く子、思いが伝わらず強い口調になる子がいる。 ・話し合いの中で、考えを伝えたり、相手の思いに気付いたり、互いに認める姿もある。		
ねらい	☆友達と考えを出し合い、一緒に活動を進めていく楽しさを味わう。 ☆友達と楽しく活動する中で、相手の思いを感じたり、約束やきまりの必要性に気付いたりして、気持ちを調整する。	内容	○共通の目的に向かって話し合い、工夫したり協力したりして表現する。 ○自分の思いを伝え、相手の思いに気付く。 ○みんなで楽しく遊ぶために、必要な約束やきまりを考えたり守ろうとしたりする。
活動仮説	・劇づくりにおいて、挑戦的な活動が展開できる状況をつくり、互いの思いに気付けるような援助をしていくことで、幼児自身が課題やきまりを見出し、友達と一緒に協力して取り組む楽しさを味わえるだろう。		
時 間		予想される活動	◎教師の援助及び環境構成
9 : 30	導入	①前時の活動を振り返る。 ・活動や話し合いの内容を振り返る。 ②どうすれば解決できるか話し合う。 ・自分の考えを伝えたり、友達の考えを聞いたりする。 ・今日の目標を決める。	◎前回話し合った、困ったことや難しかったことを再現したり、文字や絵などを使ったりして確認することで、関心を高め共通理解させていく。 ◎互いに思いや考えが出し合えるように、みんなできめた聞き方を意識させるなどして場を作る。 ◎幼児の意見を大切にしながら、言葉を補ったりヒントを与えたり、方向づけながら幼児が納得いく解決方法(きまりや約束)を探す。
9 : 40		③劇遊びをする ・サメと大きな魚が対決する場面を演じる。 ・楽しく劇遊びをするためにどうすればいいのか、気付いたり考えたり伝えたりして取り組む。	◎劇が楽しく展開できるよう音楽を準備する。 ◎友達の思いや考えに気づき、見方が広がるように葛藤や折り合いをつける場面を大事に援助する。 ◎みんなで決めた約束やきまりを守ることで、劇遊びが楽しく続けられることに気付かせる。 ◎気持ちの調整が困難な時は、心のよりどころとなっていくようにする。
10 : 05	まとめ	④今日の活動を振り返る。 ・うまくいったこと、いかなかったこと、その時の気持ちなどや考えたことについて話し合う。 ・楽しかったことや友達のよさを共感して次の劇遊びへ期待をもつ。	◎幼児が思いを言葉にして表現したり、友達の言葉に耳を傾けたりして、思いが共有できるような伝え合いの場を設定する。 ◎発言を受け止め、共感し、互いの思いに気づき、理解し合えるように思いや言葉をつなげる。 ◎劇遊びで気付いたことや互いのよさを認め合えるような場にしていくことで、自信につなげ、次への期待を持たせていく。
10 : 15			
反省評価	・幼児が共通の目的に向かう課題やきまりを見出せていたか。 ・幼児自身がきまりの必要性に気づき、協力して劇づくりをする楽しさを味わっていたか。 ・挑戦的な活動が展開できる状況を提案できたか。 ・互いの思いに気付けるような援助ができていたか。		

公開検証保育の様子

前時、大きな魚のイメージは共有できたが、サメと対決する場面で互いに必死になり、大きな魚が崩れてサメと引き分けになった。

その時の話し合いからでてきた課題（こまったくん）の解決法（ひらめきさん）を探して演じる。

① 前時の活動を振り返る

写真

写真 11 話し合いの場

◎前回、「大きな魚を作る場面」で困ったことを再現したり、文字やカードを使ったりして、振り返り、学級で共通理解できるようにする。

② どうすれば解決できるか話し合う

こうすればいいのか。
意識して頑張ろう！
（目的を持つ）

写真 12
解決方法

ひらめき
さん

◎幼児の言葉を受け止め、全体に伝えるように具体的に表現して見せたり言葉を補ったりする（写真 13）。

《大きな魚が崩れた原因と解決策》（みんなで演じるための約束や手順）

①（進む時早すぎたり、息が合わなかったりして）手が離れた ⇒ 進む速さを考える。

②（押したり押されたりして）ころんでしまった ⇒ 押すお芝居（ふり）をする。

③（みんなと合わせるのではなく）ふざけてダラダラした ⇒ 元気よく真面目にする。

写真

写真 13 互いに気持ちを合わせて進む

遊戯室の壁面に
掲示して、意識さ
せていく。



写真 15 大きな魚を作る時のスイミーの言葉
表 11 「本気でやる！」

写真

写真 14 押すお芝居をするF児

【本番は本気でやる！】

今日は、お芝居だけど、本番はサメと本気で戦っていいと思っていたF児。

これまでは集団活動に消極的で自分の思いをなかなか言葉にしなかったが、劇遊びで力を発揮し意欲的になっている。そのF児の思いが聞けたことで、みんなで「お芝居」ふりをするということを再確認することができた（写真 14）。

○幼児のイメージを掲示



写真 16 こんな大きな魚をつくりたい

遊戯室を海だと想像し、毎回自分の役になりきって劇遊びをしている。そのため、観客に見せるという気持ちは少なく、遊びそのものを楽しんでいる。B児は岩を自分の側に向けて隠れる(写真17)。

自由な立ち位置で踊るダンスなども、周りを見て移動し、間隔をとるようになってきている。劇を完成させたいという思いがあり、互いに教え合ったり、舞台裏でも応援したりする姿も見られた。

③ 劇遊びをする

写真

写真17 みんなでかくれよう

B児「このほうが隠れているみたいだから。」
その後、岩の裏側も一緒に塗る。

写真

写真18 虹みたいな波をつくろう

自信をもって、波を作れるようになってきた。

写真

写真19 大きな魚をつくろう

スイミーが中心となって持ち場を確認し合う。

劇遊びとして楽しんでいたが、お客さんが来るということで、観客を意識するきっかけとなった。
◎緊張をほぐすため、認める声掛けを多くしたり、セリフや流れが思い出せるように必要に応じて援助したりした。また、観客側から見て感じたことを伝え、演じるポイントを提案したりした。

初めてお客さんに劇をみてもらったことで、緊張したり気持ちが高まったりしている。終わった後はやり切った表情が見られたが、「サメ対大きな魚」の場面(写真20)でうまくいかず困ったことを訴えるサメ役のG児。「H児が強く押した」

表12 「ちゃんとお芝居したのに」

④ 今日の活動を振り返る

写真

写真20 サメと大きな魚の対決

- ◎思いを受け止め、全体で考えていけるように、投げかけたり、意見を聞いたりする。
- ◎言葉を補ったり、相手の思いに気付けるようにしたり、これまでの経験と繋げながら方向づけていけるよう心掛けた。

【個々に応じて】

- ◎スイミーとして、みんなにこうしてほしいという劇への思いが強くなり、周りの気持ちに気付かなくなっていたI児に対して、H児の気持ちを代弁し、自分の言動や相手の思いに気付けるようにした。
- ◎普段から困ったことが起こると、泣いてしまうH児には、泣いて誰かが解決するのを待つのではなく、自分の言葉で伝えられるように個別で話をする。

【俺はちゃんとお芝居したのに】

- 前日は、サメと大きな魚が両方転び引き分けに。今日は、押し合いをする「ふり」だと約束したのに、先頭のH児が強く押してきたことに不満を感じているサメのG児。大きな魚に勝たなかったようだ。
- ◎G児の悔しい気持ちを受け止め、話し合いの場を設定する。
 - H児は他児にも責められ泣いてしまう。
 - ◎H児もG児と同じように負けたくないという思いから約束を忘れたのではないかと。また、H児だけの責任なのかと投げかける。
 - 「待ってといっても聞かなかった」「後ろの人も下がってくれなかった」「聞こえなかった」など自分の気持ちを思い思いに伝えた。
 - みんな成功させたい気持ちは同じである。では、どうしたらいいのか一緒に考え、次へつながるように話し合った。
 - ◎他の場面では、音楽に合わせて動いていること。この場面は演じて2回目だが、運動会ではたくさん練習して成功したことなど、幼児の経験と繋げて、解決する手掛かりとなるよう方向づけていく。
 - 生活発表会に向けての期待となるよう、最後は、かけ声で振り返りを終えた。

Ⅷ 研究の結果と考察（研究仮説の検証）

研究仮説を「劇づくりにおいて、友達と協力することやきまりの必要性に気付くような協同する経験の充実を図ることで、規範意識の芽生えを培うことができるだろう」とし、本研究を進めてきた。

研究内容として、理論研究、指導計画、保育実践をもとに検証保育を行ってきた。検証保育における幼児の変容や検証前後に実施したアンケート調査の結果から、研究仮説を検証することにより、本研究の結果と考察とする。

1 理論研究

(1) 規範意識の芽生えについて

幼稚園教育要領の領域「人間関係」から、「規範意識の芽生え」と共に「道徳性の芽生え」について理解をしていくことで、幼稚園教育は、小学校以降の教育の基盤とし、教師が一方的にきまりを教え込むのではなく、幼児の気付きを大事にし、「芽生え」の時期として育てていくことが重要だと考え研究を進めてきた。

これまでの保育では、教師が問題解決を急ぎ、幼児自身が気付き、理解していくような援助に欠けていた。そこで、幼児が友達とのかかわりを通してきまりの必要性に気づき、自分の気持ちを調整していくという過程の中で「規範意識の芽生え」が培われることを目指し、保育実践を重ねてきた。その結果、「規範意識の芽生え」に対する保護者のアンケートでは、「とてもそう思う」が80%を占めた（図19）。また、検証保育後も、役割を分担して清掃活動や当番活動をするなど、互いに協力して生活する姿が見られた。このことから、「規範意識の芽生え」について捉え、意識して保育実践をしていくことが重要であると考えられる。

(2) 規範意識を培う経験

本研究では「協同的な遊び」を中心に、「様々な感情体験」をさせていくことで、幼児の「規範意識の芽生え」を捉えていこうと考えた。その際、幼児自身がなぜ規範が必要なのかに気付き、理解し、自ら納得して行動できるように、

体験を通して援助を行ってきた。そうすることで、規範に向かう態度が育まれ、自ら守ろうとする意欲が育まれてきたと考える（実践事例）。

幼児期は、一つの経験だけではなく、集団の生活や遊びを通して、様々な体験を重ねる中で「規範意識の芽生え」が培われていく。それを踏まえ、今後も継続して体験を重ねていけるよう長期的な計画を立てていくことが必要である。

(3) 協同する経験の充実

協同する経験が育まれていく過程を踏まえ（図3）、充実させるためには、「集団のかかわりを通して楽しく遊び、共通の目的が生まれる過程」、「試行錯誤しながら一緒に実現に向かうとする過程」、「いざこざなど葛藤を乗り越えていく過程」が大切である。そこで、幼児が主体となる劇づくりを取り上げた。

劇づくりを、協同する経験を育む場として見直し、教師主導ではなく、幼児主体の活動の流れから、劇づくりを展開してきた。「ごっこ遊び」「劇遊び・劇づくり」「生活発表会に向けた劇づくり」と段階を構成したことで、友達とのかかわりが徐々に深まり、互いに協力するようになり、自分の気持ちを調整していくようになっていったと考えられる。

(4) 教師の援助について

規範意識の芽生えを培うためには、幼児との信頼関係を築くことが大切である。そのために、一人一人に応じるための教師の姿勢について明らかにした（図4）。「協同的な遊び」の土台となる「主体的な活動」は、このように幼児に向き合う教師に支えられている。

そこで、幼児の実態をもとに、一人一人のよさを認めながら、個に応じた援助を行ってきた。それにより、集団から抜けてしまうB児が徐々に輪の中に入り、学級からも理解され認められるようになっていった。みんなと楽しく過ごしたい気持ちから、伝え合いにも進んで参加するようになった（表4）。幼児が、教師との信頼関係を基盤に、安心して集団の中で自己を発揮し、気持ちを調整していったものと考えられる。

2 指導計画

幼児の実態に沿って立てた指導計画を、保育後の実態調査をもとに考察する。

(1) 検証保育後の実態調査

① 調査目的

保育後の幼児の実態調査を行い、仮設の検証資料として役立てる。

② 調査方法

ア 質問紙法によるアンケート調査（記名）

(ア) 調査対象： 室川幼稚園 1 組 19 名の保護者

(イ) 調査日： 平成 23 年 12 月 20 日

(ウ) 回収率： 100% (19 名)

質問紙法と同時に、生活発表会後の感想も記入してもらった。検証資料として活用する。

イ ソシオメトリック・テスト

(ア) 調査対象： 1 組男子 8 名女子 11 名計 19 名

③ 質問紙法によるアンケートの結果と比較

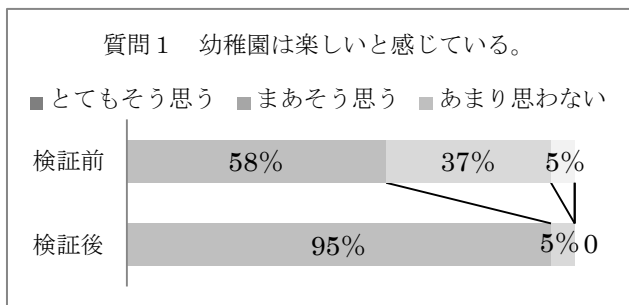


図 17 幼稚園は楽しか

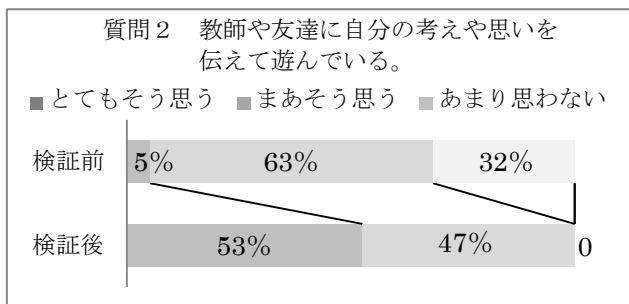


図 18 自分の思いや考えを伝えている

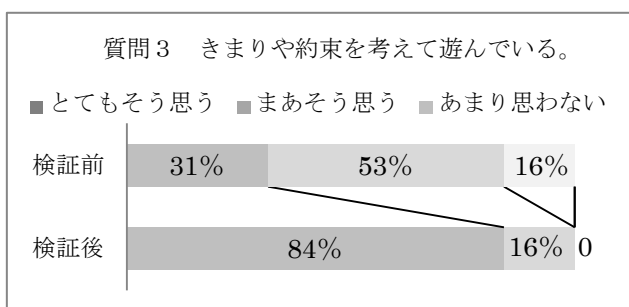


図 19 まりや約束を考えて遊んでいる

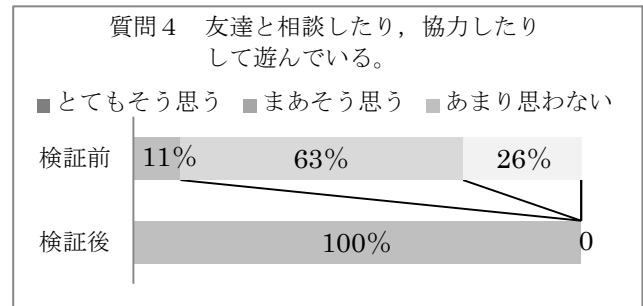


図 20 友達と相談したり、協力したりして遊んでいる

保護者には、検証前後のアンケートの依頼と同時に、活動の意図や、幼児の様子などを学級通信で伝え、活動の過程を共有してきた。また、参観日などでも共通理解を図りながら、共に幼児の成長を見守ってきた。

検証中の家庭での幼児の姿には、毎日楽しそうに劇の話していること、内緒にしていたこと、喜んで練習していたことなどが記入してあった。

生活発表会後の感想からは、「照れ屋の〇〇が人前で、自分の役になりきっていて驚いた」「堂々と、自信をもった子ども達に感動した」「一つのことを協力しながら完成させ、みんなで喜び合っているところに成長を感じた」「自分の事だけでなく友達のことまで誉めてと言っていた」「家で他の役のダンスや歌を歌ったりする姿を見て、みんなで楽しく取り組んできたのだと思った」などが記入されていた。

これまでの過程を保護者と共有してきたことで、わが子の成長と共に他児や学級の成長を感じられたという内容になったと考えられる。

検証前の「ソシオメトリック・テスト」では、少人数での友達関係の広がりが見えたため、学級の仲間としてかかわりを深めていくことが課題であった。検証後、2～3名しか選ばなかった子も含め、全員が男女6名以上の名前を挙げた。あまり選択されなかった子も、男女数名から選択された。友達と一緒に試行錯誤したり工夫したりしながら協力して遊ぶ姿も見られる。

(2) 指導計画

検証前後のアンケート結果や生活発表会後の保護者の感想から、規範意識の芽生えに関する幼児の変容が伺える。

質問3, 4から, きまりの必要性に気付く, 友達と協力するようになっていくことが分かる。これは, 質問1でほとんどの子が幼稚園を楽しんでいることから, 友達とのかかわりが深まり活動が充実していたためだと考えられる。これらのことから, 幼児の実態を把握し, 劇づくりの段階を踏まえ, 作成した指導計画は効果があったものと考えられる。

ソシオメトリック・テストからは, 学級意識が高まっていると考えられる。また, 質問2では, 自分の思いや考えを伝えられるようになった子が増えていることが分かる。しかし, 十分ではない。集団の中でも, 自分の思いを伝え合い, 主張し合えるような関係作りが必要である。

そのためには, 協同して遊ぶようになる過程(図3)をもとに, 長期的に協同する経験を重ねていけるよう指導計画を立て, 幼児同士のかかわりを深めていく必要があると考える。

3 保育実践

指導計画を通して, 以下の4つの点から「協同する経験」の充実を図ってきた。保育で取り入れた実践を中心に, 検証保育を考察する。

(1) 協同する経験を充実させる援助の工夫

保育実践においては, 活動時に幼児の姿を捉える視点として, 3つの力が育まれようとしている場面を捉えていき, 協同する経験が充実していけるように援助をしてきた。

劇づくりの姿(表7)からどのように育まれていくのか捉える。

① 遊びを工夫する力

- ・どう動けば波に見えるか
- ・虹みたいに作るにはどう並べばいいか

など試行錯誤しながら考えを出し合い, 工夫する姿が見られた。集団で思いが伝わらないもどかしさを感じながらも, 一緒に遊ぶ楽しさを感じ, 繰り返し取り組んでいた。

② きまりに気付く守る力

- ・先頭が座って隣が座るまで待つ。
- ・しっかり腕を組む。
- ・下までしゃがむ。

互いに様子をうかがいながら, 自分が何をすればいいのかなど「波づくり」の手順や約束が生まれた。また, 虹みたいに波をつくろうと工夫していく中で, 思いが違い, 葛藤したりしながら, 折り合いをつけ, 気持ちを調整する姿もみられた。

③ 言葉で伝えあう力

初めは, 「下までしゃがんで」「きつい」「先頭まだ座ってないよ」と一方的な会話であった。

「身長順に並んで」「ここがいい」「並ばないときれいな波できないよ」「ここならいいよ」と, 主張し合うようになり, 「始めていい?」「待って。まだ並んでいない」「〇〇並べた?」「もういいよ」と友達に気持ちを聞いたり, 返事を待ったりして気持ちを合わせる姿が見られた。

友達とのかかわりが深められ, 仲間意識が育まれてきたためだと考える。「すごい波だったよ」「ありがとう」と認められたことで充実感も味わったように思われる。

このような幼児の姿から, 3つの力が育まれようとする姿を捉え, 援助をしてきたことで, 協同する経験が充実していったと考えられる。

(2) 環境構成の工夫

これまでの遊びの経験を踏まえ, 主体的に活動を展開していけるような環境構成を心掛けたことで, 幼児が環境に興味を示し「海ごっこ」が展開していった(写真1)。時間と場の確保をすることで, 自分なりの表現を楽しんだり, 友達の刺激を受けたりしながら, 継続して遊びを楽しむ姿が見られた(写真3, 4)。また, 自分たちで遊びに必要なものを作ったり, 協力して場を作ったりする様子が見られた(写真2)。友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わったことが協同する経験につながったものと思われる。

活動を展開していく中では, 教師がすべて環境を整えてしまうのではなく, 幼児が必要を感じ, 自分の意志で場を作り上げていけるようにしてきた。そうすることで, 「自分たちでやった」「やればできる」という充実感や達成感を味わえるようにした。「海ごっこや劇が楽しかった

か」という間に、幼児全員が「楽しい」と答えていた。そのことから「もっと遊びたい」「こうしたい」という意欲をもって、遊びが継続して展開していったものと考ええる。

教材の準備をする際は、数を調整することで考える場面をつくった。そこで、幼児同士のやりとりが生まれ、思いを主張し合ったり、いざこざになったり葛藤したりする姿が見られた（表3）。その体験が、折り合いをつけることやどう行動すればよかったかなど、楽しく遊ぶためのきまりに気付くきっかけになり、規範意識の芽生えにつながったのではないかと考える。

環境を準備する際、教師は幼児が実現したいことを捉えていく必要があるが、幼児と目的が違うことがあった（表9）。これは、活動を通して幼児が「何を体験しているのか」、「何を学んでいるのか」という視点から幼児の姿を捉えられなかったことが原因だったと考える。

(3) 伝え合う工夫

協同して遊びを進めていくためには、互いに思いを伝え合い、イメージを共有していかななくてはならない。そこで、「劇づくり」において、学級で共通の目的に向かっていけるように、振り返りや話し合いを大切にしてきた。話の内容を4つに分け親しみやすい名前を付けたことで（図14）、何について話せばいいのかが分かり、自分の思いを伝える子が増えた（図18）。

また、話の内容ごとに色別の魚型カードにし掲示したことで、「〇〇グループは『みっけ』がいっぱい」「強そうなダンスカッコいいよね」「波をつくるときの『ひらめきさん』は私が考えたんだよ」と意識している姿が見られ、参観日などで保護者に見せる様子もあった。

「ごっこ遊び」では「ハッピー」が多く、「〇〇さんが魚の先生になってくれて楽しかった」など自分自身の気持ちを伝えていた。

グループでの「劇遊び・劇づくり」になると、「みっけ」が多くなり、互いによさを伝え合い認め合う場となっていた（表6）。

学級全体の「劇遊び・劇づくり」では、「こま

ったくん」が多くなり、一人の気付きや活動の振り返りから課題となったものを、みんなで共有し、話し合ってきた。解決に向けて「ひらめきさん」、考えを出し合っていく中で目的が共有され、活動の中で折り合いをつけたり、きまりに気付き自分の気持ちを調整したりすることにつながっていったと思われる。

このことから、4つの視点で振り返りや話し合いをしてきたことは、幼児が共通の目的に向かって協同する経験を重ねていくうえで有効だったと考える。しかし、内容を学級で共有しながら、意欲的に参加させていくことに課題を感じた。教師は、幼児の思いを引き出す発問の仕方、時間配分、方向づけの仕方など話し合いの進め方について学ぶ必要があると感じた。

(4) 「劇づくり」の展開

規範意識の芽生えを培う視点から劇づくりの流れを位置づけた（図13）。また、協同する経験が育まれていく過程を踏まえ、劇づくりに向かう指導計画を立て協同する経験の充実を図ってきた。「ごっこ遊び」、「劇ごっこ・劇づくり」、「生活発表会に向けた劇づくり」という段階を通して、仲良しの「小集団」から「グループ」、「学級」と友達とのかかわりを広げ、深めなら活動を展開する過程で、目的を共有する楽しさが生まれていった。その中で芽生えた規範意識に向かう意欲について考える。

「ごっこ遊び」の段階では、「自分や親しい友達同士で楽しく過ごしたい」という心情があり小集団でかかわりを深めているが、一人一人目的が違う。そのため一人だとつまらないという思いも体験する（表3）。

「劇遊び・劇づくり」をしていく段階では、友達関係が広がり「グループや学級みんなで楽しく劇遊びをしたい」という心情と「劇を完成させたい」という意欲が目的となった。少人数では思いを共有しやすいが（表5）、学級でイメージを共有することには、難しさやもどかしさを感じている。それでも、楽しく過ごすためのきまりの必要性を感じ、主張しながらも、相手

の意見に耳を傾け、納得しながら自分の気持ちを調整していく姿がみられた（表8）。

「発表会に向けた劇づくり」をしていく段階では、学級の仲間意識が高まり、「劇を人に見せたい」という心情と、自分たちだけが楽しむだけではなく「見る人を喜ばせたい」という意欲が幼児の共通の目的となった。劇を楽しませるには、自分の役割を考え、みんなで協力して相手に内容を伝えなければならないことに気付き、互いに意識し合いながら手順や約束を考えて動く姿が見られた〔実践事例（3）〕。

このように、段階を経ながら、協同する経験の充実を図ることで、幼児は徐々に友達とのかかわりを深めていった。そして、互いに思いをくみ取りながら、自分の役割を考え、一人の目的ではなく、みんなで共通の目的をかなえようと協力するようになっていった（図20）。さらに、自分たちだけでなく、相手を喜ばせたいという気持ちにつながっていったと思われる。

これらの土台となっているのは、友達と一緒に遊びそのものを楽しみ、続けたいという意欲である。そこできまりの必要性を感じ、自分の気持ちを調整しながら考えて行動するようになってきたといえる。このことから規範意識の芽生えが培われてきたと考えられる（図19）。

Ⅸ 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

（1）劇づくりにおいて、「ごっこ遊び」「劇遊び・劇づくり」「発表会に向けた劇づくり」という段階を構成し、協同する遊びを展開したことで、友達とのかかわりが深まり学級で協力して活動するようになった。

（2）学級の仲間意識が高まり、共通の目的に向かって「一緒に遊びを続けたい」という思いが、きまりを守ろうという姿勢につながり、気持ちを調整する力を育むことになったと考える。

（3）協同する経験の充実を図るために、3つの視点で幼児を捉えて援助の工夫をする。主体的に取り組める環境構成の工夫をする。互いに認め合える伝え合いの工夫をするなどの取り組みは、劇づくりにおいて、規範意識の芽生えを培うために効果があったと考える。

以上のことから、劇づくりにおいて協同する経験の充実を図ることで「規範意識の芽生え」が培われるという一定の成果があったものと考えられる。

2 今後の課題

（1）協同する経験の充実のために伝え合う工夫をしてきた。しかし、幼児一人一人の思いを引きだし、自ら課題や可能性に気付いていけるように話し合いを進め、調整していくことに難しさを感じた。伝え合いを充実させていけるよう援助の工夫に努める。

（2）相手の思いやきまりの必要性に気付き、気持ちを調整するようになっているが、自分の思いを伝え、考えを主張することに不十分な面がみられた。集団の中で一人一人が自己を発揮できるような学級づくりに努める。

（3）規範意識の芽生えを培うためには、幼児が規範を守る必要性に気付き、自ら守ろうとする体験の積み重ねが重要である。今後も、集団生活や遊びを規範意識の視点で見直し、様々な体験を通して継続的な指導が必要である。

<主な参考文献・引用文献>

- ・無藤隆 2011 『保育の学校』第1巻・第2巻 フレーベル
- ・森上史郎／柏女霊峰編 2010 『保育用語辞典 第6版』 ミルネヴァ書房
- ・2010 『指導の手引き 人との関わりを豊かにする教育の推進』 兵庫県教育委員会
- ・2009～2010 『初等教育資料』幼児教育 事例 東洋館出版
- ・文部科学省 2001 『幼児期における道徳性の芽生えを培うための事例集』 ひかりのくに